

第 22 回福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会 議事概要

I. 開催日時および場所

日時：2022 年 2 月 17 日（木）9:30～11:30

場所：Zoom によるオンライン会議

II. 委員

別紙名簿の通り

III. 資料

- 議事次第
- 参加者名簿
- 【資料 1】福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会委員名簿（2022/2/17 版）
- 【資料 2（非公開）】福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（第 21 回）議事概要
- 【資料 3】令和 3 年度双葉郡教育復興ビジョン取組実施報告 0217
- 【資料 4】浪江町資料_震災遺構浪江町立請戸小学校しおり
- 【資料 5】福島県双葉郡教育復興ビジョン推進計画書第三期（最終案）
- 【資料 6】推進計画書第三期変更箇所抜粋（見え消しあり）
- 【資料 7】双葉郡の教育に関するアンケート調査結果報告書
- 【資料 8】双葉郡の教育に関するアンケート集計結果（子ども向けダイジェスト版）
- 【資料 9】令和 4 年度双葉郡教育復興ビジョン推進体制・委員会等の構成、取組一覧（案）
- 【資料 10】令和 4 年度双葉郡教育復興ビジョン取組実施計画（案）
- 【資料 11（非公開）】福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校活動報告
- 【資料 12】【R3 文部科学省資料】避難指示区域等内における魅力ある教育環境づくりに向けて

IV. 議事内容

1. 開会

1) 開会挨拶（秋元副座長・川内村）

- 今般のオミクロン株の爆発的な拡大もあり、子どもたちの安全確保と学力保障をいかに両立させるか、難しさがいっそう増している。一方で、5 年後のこの地域では、各種のインフラが整備されて新しい産業が創造され、社会のDX化は着実に進んでおり、福島国際研究教育機構も姿を現しているだろう。
- このような環境を見据えて、子どもたちの個別最適で協働的な学びを保障していくために、それぞれに困難があっても、今やるべきことを着実に実践して効果を出していくことが我々教育長に求められている責務ではないかと思う。

2) 委員自己紹介

2. 前回（第 21 回）議事概要確認【資料 2】

- （全会）承認

3. 議事

1) 今年度の各取組実施状況について【資料 3】（事務局）

- 昨年度に続いて「第 8 回ふるさと創造学サミット」をオンラインで開催。計 20 セッションを YouTube でライブ配信。多くの方々に双葉郡の子どもたちの学びを見ていただいた。子どもたちにとってサミットは、お互い刺激を受けたり与えたり、充実感も得られたりする学びの貴重な場になっている。
- 「第 9 回教職員による双葉郡子供未来会議」では鳴門教育大学の泰山裕先生を講師に招き、「総合的な学習の授業設計」として講演いただいた。シンキングツールを使用するにあたって具体的な考え方、総合的な学習の時間の意義、授業の設計の仕方などの話を頂いた。
- 広報誌「ふたばの教育 Vol. 12」も順調に制作中。今年度もふたば生徒会連合の子どもたちが制作に関わった。

（担当教育長より）

- （浪江町）教員研修担当。参加者からは、「主体的な学びを実現するための総合的な学習の時間をどうデザインしていくかという見通しを持つことができた」等前向きな声をたくさん頂いた。今後も各校の教育活動の充実につながる研修を展開していきたい。
- （富岡町）サミット担当。今年度もオンラインだったが、サミットのスローガンからずれることなく実施できた。今後は、双葉郡ならではの「ふるさと創造学」やサミットについて、これがなぜ始まったのか、なぜ必要なのかということについても各校で研修を深めて実践していきたい。
- （葛尾村）生徒会連合担当。子どもたちは町村の垣根を越えて交流し、楽しそうに友達をつくっている。協力していくおもしろさだけでなく、関わる子どもたち一人一人にとって何か発見や変化が生まれるとよい。

（委員意見・感想）

- コロナが学校現場に難しさを与えている中、8 町村と事務局がこれだけ連携し、拡大しながら質の高いことをしていること、10 年という月日が経つ中での各関係各者の努力に大変深く感動している。

2) 各町村教育委員会の現状と課題

- （川内村）今年度から新たに保育園、義務教育学校を含めた教育システムを開始。定着のため、学校、地域、家庭、行政が一体となって取り組んでいる。震災後、住民が減り、村自体がコンパクト化しており、今後、村のあり方も学校も変わっていくだろう。被災後に転入した子どもたちが 109 名中 50 名。新たに転入した方々への精神的なフォロー体制もしっかりつくっていきたい。
- （浪江町）【資料 4】以前、1,700 名以上が学んでいた小学校 6 校、中

学校3校が閉校。震災遺構請戸小学校は開館36日間で来館者1万人を達成。今後も教育旅行などで活用してほしい。生涯学習施設を再整備しており、子どもたちの屋内運動施設は来年度中には運用開始予定。児童・生徒は32名、こども園が29名。わずかずつ増加傾向。小中学校は加配のおかげで複式が解消できているが、特別支援学級がなく、通常学級で対応せざるを得ないのが課題。

- （葛尾村）秋以降、小学校に転入生が2人入り、それぞれ1名だった学年に1人ずつ入り、2名ずつの学年ができた。今春の小学校の入学生は3名の予定で、小中で唯一の3名の学年となるのでうれしく思う。コロナで地域の方々との交流の機会がなかなか持てない状況だが、学校も子どもたちもいろいろ考えて挑戦している。昨年末に、村の学校運営協議会がスタート。
- （双葉町）現在も県内で306名、県外に177名、計483名の子どもたちが避難している状況。いわき市錦町の仮設校舎には、幼児6名、小学生32名、中学生6名、計44名在籍、柔軟な小中連携による教育活動を進めている。令和4年6月中には特定復興再生拠点区域の避難指示が解除される。8月末に町で行政サービスを開始予定。新しい学校の具体的な検討の準備もいよいよとなる。
- （大熊町）幼稚園4人、小学生6人、中学生2人で、合計12名が在籍。県内外に区域外就学をしている子どもたちは約800人以上、そのうち400人以上がいわき市。令和4年4月に義務教育学校「学び舎ゆめの森」を開校。令和5年3月に大熊町に新校舎が完成予定で、12年ぶりに大熊町に戻る。現在在籍している12名のうち4家庭8名が、来年、大熊町に戻る決断をしている。戻ってからの児童・生徒の増加が一番の課題。障害を持つ子どももおり、放課後デイサービスの検討も必要。
- （富岡町）3月31日をもって富岡第一・第二小中学校4校を閉校、避難先の三春町で開所した幼稚園・小中学校三春校を閉所。4月からは小中併設型、小中連携校として富岡小学校・富岡中学校を再スタート。3月に富岡町放課後児童クラブを開所、学校給食調理場も完成予定。現在は55名在籍、4月からはまた2名増える。町の子育て世代の移住・定住施策の推進と教育の無償化施策の成果である。
- （広野町）「ふるさと創造学」や各種行事を通して、子どもたちのコミュニケーション能力、社会性などの面で成果が上がってきている。この2年間、地域を巻き込んで人権教育を実践。その成果について、パンフレット「つながり」を作成。若い教職員が多くなってきており、教職員による他町村との合同研修会やサークル活動の推進、特別支援教育やICT機器を活用する研修会を実施していきたい。

（委員意見・感想）

- 子どもたちが増えているのが非常に感慨深い。帰還が思うように進んでいないという現状もあるが、子どもたちに地域を好きになってもらい、地域に根づき、将来を担う主役になってもらうことが大事。復興庁として支援できることがあればしていきたい。

- 先生方の大変な状況、スクールカウンセラー、子どもたちの心の問題などを踏まえ、文科省の支援メニューについても、さらに今後を考えていきたい。
- 町村によって復興の状況がかなり違う中、それぞれ非常に苦労しながらアクションをとっていることを改めて実感。復興局は現場の取組、声を伺いながら、本庁なり関係省庁へ課題等をつないでいきたい。
- 各町村で子どもたちが前向きに過ごせるように工夫していることは素晴らしく、特定復興再生拠点区域の避難指示の解除などが進んでいることも喜ばしい。教育への影響も考えていかなければいけないという相談もあり、今後、状況に変化などがあれば、一緒に課題に向き合っていきたい。
- 今では新しい住民層がおり、一緒にふるさとを理解し、創造していくという要素が大きくなってきた。改めて、教育を柱にしながら、その地域の未来をつくっていくために、学校、家庭、地域が将来をどう見据え、どう連携の必要性を築いていくのかということが問われていると感じる。

3) ふたば未来学園中学校・高等学校活動報告【資料11】(柳沼委員・ふたば未来)

- 未来創造探求では、1年の地域の課題把握フィールドワークから演劇までの流れの強化、論文ループリックの活用による論文指導強化、みらいフォーラムの開催が今年度新たに行った取組。引き続き、フィールドワークでは8町村の地域の方々に支援いただいております、大変ありがたい。
- 今年度の取組の成果としては、ループリック評価の平均値、本取組による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合、保護者の肯定的意見の割合がそれぞれ上がっている。
- 演劇から探求への連続性、人材育成と地域復興の相乗効果を創出する連携に加え、教員自身のウェルビーイングの実現、取組の効果的な発信が課題。

(委員質問)

- 保護者の肯定的意見の割合が増えているということだが、保護者は具体的にどういうところに肯定的な印象を持っているのか。また、ループリックに基づく評価は生徒自身がやっているのか。
⇒9月の探究発表会では、高校生だけではなく、中学生も発表した。オンラインで保護者に直接見ていただいたことが学びの成果への高評価につながったのかと考える。ループリックは生徒自身の自己評価。ただ、自己評価が低い生徒もおり、適正な自己評価につながるよう、面談を実施して教員がある程度、評価をしている。

4) 双葉郡教育復興ビジョン推進計画書第三期(案)について【資料5】【資料6】【資料7】(小野田委員・葛尾村)

- 前回の協議会で第三期一次案を提案し、そこで出た意見を基に教育長

会の中でさらに検討を重ね、保護者や地域へのアピール、発信、取組の場面、手だてなどをより具体的に表現して加え、最終案とした。

(委員意見)

- 今までの取組の成果・課題を踏まえ、今後、強化すべきことが具体化されたことは素晴らしい。具体的にどう実現していくかは、引き続き一緒に考えていきたい。アンケートまとめも、今後、活用していきたい。
- 「教員研修や子供未来会議のオープン化を図ろう」という点が大変興味深く、素晴らしい。組織は開けば開くほどうまくいくことのほうが多い。この会のように開いた取組を引き続き第三期に取り組んでほしい。

⇒ 承認

5) 令和4年度推進体制・行事計画(案)について【資料9】【資料10】(事務局)

- 次年度の推進体制・委員会等の構成について変更はない。小学校絆づくり交流会が8月1日(月)、中高生交流会が8月4日(木)、第9回ふるさと創造学サミットが12月3日(土)開催予定。サミットは双葉郡内での対面開催を検討。推進計画書に従い、取組の外部への発信、オープン化等について、実行委員会等でさらなる工夫と強化を検討していく。

⇒ 承認

6) その他

(1) 委員からの情報共有【資料12】(淵上委員・文部科学省)

- 次年度予算案には引き続き子どもたちの厳しい状況を踏まえ、就学支援、教職員配置、スクールカウンセラーの配置、「ふるさと創造学」などのカリキュラムを推進・普及するための教育復興推進事業、福島イノベーション・コースト構想を担う人材育成などを盛り込んでいる。
- 原子力災害被災地域においては第2期復興・創生期間の5年目に当たる令和7年度に復興事業全体のあり方について見直しを行うつつ、当面10年間、本格的な復興・再生に向けた取組を行うとされている。今後も復興庁や県教育委員会と連携しながら、要望に沿った教育の復興に向けた支援を行っていきたい。
- 復興ビジョンの5つの基本方針のうち、「双葉郡から新しい教育を創り出し、県内・全国へ波及させる」という内容が第三期推進計画に色濃く出始めているのが非常に素晴らしい。事業の波及が全国の教育の変化につながるとよい。

(2) 今後の協議会開催予定

- 次年度も2回開催予定

(3) 補足事項【資料7】【資料8】(事務局)

- (アンケートまとめについて) アンケート調査結果報告書完成版には、出現頻度が高い単語がひとめでわかるよう、ワードクラウドを追加した。また、子ども向けダイジェスト版は、回答した子どもたちにもきちんと内容を届けるため用意した。

(委員意見)

- アンケートは大変感動した。ちょうど震災の翌年の浪江町の「子どもアンケート」には、子どもたちの直筆そのままの回答が掲載されている。子どもたちの直接の声は、当時、ものすごく多くの人たちに響いた。今後のアンケートでは、こういう集計の仕方も検討してはどうか。

4. 閉会 (中田座長・福島大学)

- 第三期の計画が承認された。引き続き計画にのっとり、県、自治体、8町村が連携を十分にとり、各小中学校と未来学園とも連携・協働をとり、福島、ひいては日本を担っていく児童・生徒の成長を、引き続き責任を持って支援することができるよう、努力を続けていきたい。
- 双葉郡の小中学校の義務教育期間で鍛えられてきた「ふるさと創造学」の成果が、未来学園でさらに深められている。それを引き受ける地元の国立大学法人の責任は重い。大学と各種の学校とも連携をきちんと密にしながら展望を開いていきたい。
- 子どもの成長を支えるためには大人の成長が必要。生涯学習活動や社会教育活動など、大人も両輪として育つことを視野に入れた教育計画がなされ始めているのも大変心強い。閉じることのない、開かれた双葉郡の教育復興と創造にこれからも努力したい。

(以 上)